

ママは「最近やけに暑いわね」と言っ、首元にタオルを当てがった。本当に暑かったのである。

パパは「そうだな」と小さく呟いた。パパはママの首元の蚊に刺されを、不倫の印だと思っ、勘ぐった「そうだな」を言っ、つもりだった。「あいつは今、その首元をタオルで隠したんだ」

犬は「人に向かって「ワン！」と吠える。(母さん、水受けが空っぽだ)」

ママは「はいはい、お散歩ね。でもちよつと待っ」といっ、犬を撫でる。別にちよつと待っこともなかつたのだが、そう言う方が雰囲気が出るかなと思っただけだった。

(ここでインターホン)

「あら」

ママが急いで玄関口に向かうと、パパは「いい、俺が行くよ」と言っ、何の根拠もなかつたが、今ドアの先にいる郵便配達員が、ママの不倫相手だと思っ、たからである。ママは「ありがとう」と言っ、微笑んだ。

「こちらに印鑑を」「どうも」

パパは郵便配達員を眺める。上から下まで。何か残穢が残っ、ているような気がして、眺める。

郵便配達員はそれに気づいたが声はかけない。(もしかしてこの人、ゲイなのかな?)

郵便配達員はゲイだった。根拠のない勘だが、そういう勘の世界なのだ、僕たちの生きる世界。ここで声をかけるべきだったかもしれない。しかし郵便配達員は今日の夜、予定があつた。ボーイフレンドと会う予定が。

「じゃあどうも」

郵便配達員は去っ、ていく。今日は定時に帰らないといけない。

パパは荷物を持ってリビングにやっ、て来る。「これ、お前の荷物だぞ」(やっ、ぱりあの男、ママの不倫相手だ)

「ありがとう」私はそうして荷物を受け取った。小さい段ボール箱だ。割れ物注意のシール。私はこの荷物の中身を知っている。洋服なんかじゃない。化粧品でも、可愛いぬいぐるみでもない。小さい命だ。ボロボロで今にも死にそうな、小さい命。私は自室へ向かう。そうしてこの箱を開けるのだ。ゆっくりと、覗き込むように。誰にもバレないように。